

高校中退者の就労をめぐる語り —ライフストーリーにおける特異な位相—

○中央大学 古賀 正義

【概要】

1. 目的

若者への社会的排除が強まるなかで、高校中退者に対する社会的関心が高まっている。高校での支援・教育の欠落が、就業の困難や家庭の不和などに直結するからである。しかしながら、中退者への聞き取り結果からは、短期間であろうと非正規の就労体験が自己肯定感を生み出すことは多く、ライフストーリーの中で特異な位相を示すことがわかる。ここでは、「生きづらさ」を抑制する就労の意味が生じる社会背景や対人関係資源の特徴について検討を加えたい。

2. 方法

2010年11年の都立高校中退者について、悉皆アンケート後に、インタビュー調査（48名）を実施した。中退後の進路分化は図の通りである。予想されるとおり、中退者の進路選択は紆余曲折を経て行われ続ける。高卒資格検定取得など学習活動も織り交ぜながら、フリーターとして時々には多様な職場（例えば、居酒屋やコンビニ、ファミレスなど）で非正規就労を行っている。だが、従来指摘される「働かない・働けないニートの若者像」とは異なり、むしろ「自分の生活スタイル」を絶えず探索し何かに参加し続けていく事例の多いことが注目される。

3. 結果

中退者の語りには就労経験がもたらす自己の微妙な変化やささやかな自信が語られやすかった。それは学校時代に経験してきた「生きづらさ」の体験を払拭する要素を多分に含んでおり、職務内容の高度さより、自分で裁量・判断できる範囲の広さややりがいに依拠する場合が多かった。例えば、はじめを受け中学時代から不登校となり特色校を中退しながらも、ファーストフード店でマネージャーにまでなった経験を持つ男子Aや、中学校と違い退屈な授業ばかりの進路多様校を中退し当初は遊んでいたものの、いまや週4日バイトに精を出す女子Bの事例をあげることができよう。A「(コミュニケーションが)数カ月である程度は、はい、とれるようになって」、B「楽しいです。・・・何か高校って、友達としゃべってるのは楽しいんですけど、何かその次に来る(間の悪い)時間とかが嫌いで」こうした事例をみると、就労による社会参加が、学校生活への適応よりむしろ「壁の低いもの」だったことの意外さが強調されていた。「働ける・稼げる自分」への変化を冷静に肯定的に評価しようとする姿勢がそこにはあった。

4. 結論

中退者にとって、就労体験がもつ「自己物語の構築資源」としての豊かさや、「対人関係資源」を拡張させる感覚などがあることが、この調査からは明らかになった。彼らの経済的あるいは文化的な阻害状況や進路選択の困難とは別に、ライフストーリーにおける中退者の「進路探索する力」の手ごたえに目を向ける必要性のあることが指摘できる。

